



Title	デンマーク語の子音(その一) : 閉鎖音音素
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1980, 5, p. 3-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95877
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の子音（その一）

—閉鎖音素—

間 瀬 英 夫

1.1. 序：

本論では現代デンマーク標準語（以下「デ語」と略す）における閉鎖音素（＝基底セグメント）/p, t, k, b, d, g/ とその音声的実現形について、これらがデ語子音音韻論の中でどのように解釈されてきたかを順次追いついていながら検討していきたい。この中に、特にとり上げるのは音節末 /d/ の実現形に関する解釈、それに関連する「弱化」、「無声化」等の問題である。本論では形態音韻規則は体系的には扱わず、それらの規則が有効に働くようにするための基本語形の設定を目標とする。基本(語)形とは、共時形態音韻論的に非屈折、非派生、非合成の語形のこととする。ただし、動詞不定詞形は不定詞語尾 -e(/ə/)を伴うものも伴わないものも基本形とみなす。派生形とみなす語形も必ずしもデンマーク語、特に近世以後のデンマーク語において造られた派生形とは限らない。すでに古ノルド語の時代に派生形となっているもの (værdig←værd) とか、外来語 akkord-akkordere のように各々別々に借入されたものとかも含む。つまり母語話者がごく自然に派生形というか関連形として認め得るものはとり入れる。これは今までの音韻論者のとってきたやり方でもある。

この他、術語、音声記号などについて、二、三断っておきたい。まず、通常の綴字による表記であるが、綴字と閉鎖音素の記号が一致するときとか、音素を決定していないときとか、音声記号表記の煩雑さを避けるときとかに用いる。次に、「強母音」(full vowel) というのは shwa 以外の母音のこととするが、必ずしも強強勢をもつわけではない。音声記号は

大筋において IPA を用いるが、印刷の便宜などを考えて、一部 IPA 以外の記号を用いる：[r]=IPA [ʀ], [ɹ]=IPA [p̥, ḁ, ʌ̥], [ʔ]=stød.

なお, stød および強勢記号 [ˈ], [ˌ] を通常の綴字中に示すこともある。

基底素性に関し、もっとも重要なものは次の通り： [+voice]: /b, d, g, v, j, l, m, n, r/, [-voice]: /p, t, k, f, s, h/; [+sonorant]: /l, m, n, r/. この他の素性で関与的なものは §3. で示す。

1.2. 閉鎖音素の基本的実現形：

閉鎖音素の 音声的实现形はUldall (1936) 以来、基本的には次のようになるというのが定説となっている（Ⅰ = 強母音を含む音節の音節頭第一子音, Ⅱ = 弱音節頭, Ⅲ = 音節末）：

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
/p/	[p-	b-	-b]	/b/	[b-	b-	-b]
/t/	[t-	d-	-d]	/d/	[d-	d-	-ð]
/k/	[k-	g-	-g]	/g/	[g-	g-	-ð]

[p, t, k] と記した音は無声有気軟音, [b, d, g] は無声無気軟音である。したがって、より精密な IPA 表記では各々 [b^h, d^h, g^h], [b̥, d̥, g̥] となるが (cf. 拙論 (1973)), 本論では [p, t, k], [b, d, g] を用いる。その理由は(1) [p, t, k] と [b, d, g] は音声的には「有気性」(aspiration) によって対立するが、音素的には(=基底では)「有声性」(voice) の対立とみなすこと (これは通時的, 共時的音韻規則設定および説明のために妥当である), (2) 音素記号 (および綴字) と 音声記号の一致度が高いこと, (3) ダニア (=デンマーク式) 音声記号に一致する, (4) 印刷上便宜であること, などである。[ð] は Uldall が記述した時代のデ語, つまり, 現時点でいえばかなり年輩の世代の言語で用いられる軟口蓋有声摩擦音である (cf. Andersen (1954, 347); Brink/Lund (1975, 284ff.)). 現今

ではこの音は用いられず, [i, u] または ゼロ (条件変異音) となるが, これは本論でとり上げる音韻規則よりずっと後の表層実現形に近い時点でとり扱われるべき規則によるものなので, 本論では [∅] のままで用いる。

さて, /p, t, k/ と /b, d, g/ が音韻的に対立する位置は, まず第一に強母音を含む強音節頭の第一子音となるときである。この場合, 対立は音声的にも閉鎖音 [p, t, k] 対 [b, d, g] となるが, 音声的に閉鎖音によって対立が実現されるのは原則としてこの位置においてのみである:

/p/ [p]: pur Pelle pære passe
 /b/ [b]: bur bælle bære basse bække
 /t/ [t]: tur tælle tære tække
 /d/ [d]: dur dælle dække
 /k/ [k]: kur kære kasse kække
 /g/ [g]: gælle gære gasse gække

/p/: park pil plade prik pjække
 /b/: bark bil blade brik bjælke

/t/: tø tom træne tværs tjene
 /d/: dø dom dræne dværg djævel

/k/: ked kane klat kro kny kjortel
 /g/: ged gane glat gro gny gjorde

次に, 音節末では /p, t, k/ と /b, d, g/ は各々 [b, d, g] と [b, ð, ∅] で対立が実現される (stød ['] を表記してある母音は長母音, その他は短母音):

/p/ [b]:	tap	hop	nip
/b/ [b]:	ta'b	hà'b	kne'b
/t/ [d]:	mat	gut	mæt
/d/ [ð]:	mad	gud	med
/k/ [g]:	dok	præ'k	kvæk
/g/ [ø]:	(dog)	præ'g	kvæ'g

強母音と shwa の間に現れる閉鎖音素は次のように実現されると言われる（語例はいずれも単形態形；強母音の音長は，1 = 長母音，2 = 短母音，3 = 短母音（/p, t, k/），長母音（/b, d, g/））：

1	2	3
/p/ [b]: proper	rippe	tappe hoppe
/b/ [b]: sober	ribbe	tabe håbe
/t/ [d]: note	rette	lytte putte
/d/ [ð]: node	redde	lyde pude
/k/ [g]: præke		kokke hakke
/g/ [ø]: præge		koge hage

これらの実現形は前述の単音節形末の実現形と同じである。それ故，「母音間の一個の子音は，強母音と shwa の間に現れるときには，原則として先行音節の音節末子音となる」，と言われる（cf. Basbøll (1972a, 194; 1973a, 25; 1974, 72)）。

上例に示したように，音節末母音後では /p/ と /b/ の対立は中和され両者とも [b] で実現される（これについては § 1.5. で述べる）。一方， /t, k/ 対 /d, g/ の対立は保たれるが，その対立は音声的には閉鎖音対摩擦音によって実現される。

この他の場合については順次述べるが、この音韻解釈の特徴はまず第一に閉鎖音音素の実現形として音声的に閉鎖音のみではなく、摩擦音も含むことである。このことは通時的音変化の特徴を如実に示すもので、この音節末というか語中、語末の弱位置での「閉鎖音の弱化」こそデンマーク語とスウェーデン語の分化を特徴づける音変化の一つと言われている。/d, g/ が弱化するのに対して /b/ は弱化しないかのように見える。たしかに現代語においては /b/ は（一般に）弱化しない。しかし、通時的には /d, g/ と同様の弱化を経ているのであるが、/b/ の場合綴字も音素もすでに v とか f に変化しているのである（この通時的弱化については拙論（1978a）を参照されたい）。

上述の場合に関する限り、Uldall 以来の閉鎖音の解釈は通時的にも共時的にも明瞭であるが、これで全てが解決したわけではない。特に /d/ の音節末実現形については、未だ半分しか明らかになっていない。形態音韻的交替を考慮すると、/d/ の音節末実現形は基本語形中で [ð] ばかりではなく、ゼロ（＝無音）も [d] も認める必要が生じてくる。この中心的な /d/ の問題は §2. で扱うことにして、まず閉鎖音全体に関する子音連結と音節末の [b] についてみてみることにする。

1.3. 頭子音連結中の閉鎖音：

閉鎖音音素が音節頭第一子音にならない場合というのは /s/ の後で第二子音になる場合のみであるが、このときは /p, t, k/ と /b, d, g/ の対立は中和され、[b, d, g] となる：

- [sb]: spark (cp. park [p], bark [b]),
 spande (cp. pande [p], bande (v.) [b]);
 [sd]: stå (cp. tå [t], då [d]),
 stække (cp. tække [t], dække [d]);
 [sg]: skaffe (cp. kaffe [k], gaffel [g]),

skænde (cp. kende [k], gende [g]).

sp-, st-, sk- 綴りの p, t, k は英語などでは各々 /p, t, k/ と解釈されているようで、デ語でも Vestergaard (1967) は /p, t, k/, すなわち /sp, st, sk/ と解釈しているが、Basbøll は /sb, sd, sg/ と解釈しているようである (cf. Basbøll (1973b, 113))。筆者も次の理由から /sb, sd, sg/ と解釈する：すなわち、音節頭子音連結は最高三子音連結であるが、いかなる場合にも第二、第三子音は基底では「有声」の子音である：二子音連結：/sb, sd, sg; sv, sm, sl, sj; tv, kv, gv; (pn), kn, fn gn; pl, kl, fl, bl, gl, vl; pr, tr, kr, fr, br, dr, gr, vr; pj, tj, kj, fj, bj, dj, gj, vj, mj, (nj), lj/; 三子音連結：/sbl, sbr, sbj; sdr, sdj; sgv, sgl, sgr, sgj/。sf- 綴りの語は sfære, sfinks など二、三の外来語にしか現れないが、これらの sf- は通常 [sv] と発音され、sv- [sv] と発音上区別はない (Aage Hansen (1971, 159))。したがって、たとえば sfære と svære は同音異義、音素的には両者とも /svɛ:ɾə/ となる。
(/p, t, k, f, s/ (= [p, t, k, f, s]) の後の有声子音状音が大なり小なり無声化される現象 (cf. Andersen (1954, 341ff.)) はずっと後の最終的実現形 (に近い) 段階の規則によるものである。)

1.4. 尾子音連結中の閉鎖音：

尾子音連結中の閉鎖音の中、/p, t, k/ の方は明瞭といえるが、/b, d, g/ の方、特に /d/ は種々の問題がある。これは形態数 (単形態か複形態か)、音節数 (単音節か複音節か)、音節境界の位置など形態音韻的に中心的な事柄がからんでくるからである。

しかし、その基礎となるのは当然ながら単形態単音節形であるので、まずその場合をみてみよう。なお、本論では動詞命令形に現れる特殊な (基底で例外的な) 連結はとり上げない (cf. Basbøll (1970))。

/p, t, k/ は各々 [b, d, g] の形で次の連結に現れる (l)=母音直後の

第一子音として；(2)=第二子音として)：

/p/：(1) /ps, pt/；(2) /rp, lp, mp, sp/；

/t/：(1) /ts/；(2) /jt, rt, vt, lt, mt, nt, st, ft, pt, kt/；

/k/：(1) /ks, kt/；(2) /jk, rk, lk, nk, sk/.

/b, d, g/の方は次のようになる。/b/は子音連結に参加しない。/d, g/は第一子音としては現れない。第二子音としては、/g/は /l, r/の後に [ð] として現れる (Uldall (1936, 56))。 (この他、/g/は /n/の後にも現れ、/ng/は [ŋ] で実現される (Uldall, *ibid.*))：

/k/ [g]：værk kork ark talk valk mælk

/g/ [ð]：dværg sorg arg talg valg bælg

/d/は Vestergaard (*op. cit.*)によれば第二子音としては現れないことになるが、本論では形態音韻変化を考慮してゼロまたは [d] の形で現れると考える。これは大きな問題なので §2.でとり上げる。

全体として、/p, t, k/にくらべ /b, d, g/の尾子音連結への参加は少ない。複形態単音節形を加えてみても、名詞所有格の -s (/s/) を付加した /bs, ds, gs/、形容詞単数中性語尾 -t (/t/) を付加した /bt, dt, gt/ が加わるに過ぎない (/dt/は同化により [d] で実現され则认为るが、Vestergaard は /dt/ を認めていない)。この他、解釈次第で動詞過去分詞語尾 -t (/t/) を付加したときの /bt, dt, gt/ も認め得るが (cf. §1.5.)、たとえこれを認めても子音連結の数は増えない。

単形態単音節形における三子音連結には、/p, t, k/は参加するが /b, d, g/は参加しない：/jst, rst, lst, mst, nst, vst, kst, rps, rts, nks, rft, lft, lkt/。

上述の事実は、音節末位置での閉鎖音の「弱化」がたしかにデ語に特徴

的ではあるものの、たとえば、ドイツ語などに典型的に現れる語末閉鎖音の無声化と同様の現象がデ語にも十分存在することを示唆するものといえよう。このことは、次節以下に述べる音節末第二子音としての /d/ の実現形の問題とも関連するものと思われる。

1.5. 音節末の [b]:

§1.2. で /p/ と /b/ は音節末ではともに [b] で実現されると述べた。この [b] は /t, d, k, g/ の音節末実現形とくらべてみると、明らかに /t, k/ の実現形 [d, g] と同じ音類に入る。それ故、音節末 [b] は /p/ の実現形であって、/b/ は音節末には現れないという考え方もある。通時的な /b/ の弱化については前述 (cf. 拙論 (1978a)) の通りであるが、現代語において、形態音韻的交替を考慮して音節末 [b] は次の理由からやはり /p/ および /b/ の実現形であると考えたい。

動詞不定詞 *købe* [kø: bə], *koge* [kɔ: ʔə] の過去形 *købte* [købdə], *kogte* [kʌgdə], 過去分詞形 *købt* [købd], *kogt* [kʌgd] の [b, ʔ] ~ [b, g] の交替における音節末 [g] は /k/ の実現形と解釈し、不定詞形の /b, g/ ([+voice]) は屈折形で /p, k/ ([−voice]) に変化すると考えたい (この考え方は拙論 (1976; 1978b) のそれと部分的に異なる点があるが、これは簡単には述べられないので、別の機会にとり上げる)。この場合、強母音の音長と後続閉鎖音の有声性が相関関係にある蓋然性がある (cf. 拙論 (1976; 1978b))。

次に、主として外来語系の語彙に現れる現象であるが、次のような形態音韻的交替がみられる：

	音節末	弱強勢音節頭	強強勢音節頭
	[b]	[b, (p)]	[p]
/p/	filan ¹ trop	filan ¹ tropisk	filantro ¹ pi
	stereo ¹ skop	stereo ¹ skopisk	stereosko ¹ pi

[b]	[b]	[b]
/b/ hydro ¹ fob		hydrofo ¹ bi
	kubisk	ku ¹ bik-

これらの場合、強音節頭では /p/ 対 /b/ が [p] 対 [b] で実現されるので、音節末の [b] は基底 /p/ のみではなく /b/ から派生すると解釈するのが妥当であろう。

形態音韻的交替がない場合には、音節末 [b] が /p/ か /b/ かの決め手はない。前述の k**ø**be ~ k**ø**bt(e) などの母音音長と後続閉鎖音の有声性との相関関係を考慮すると、lap, lab [lab], rippe, ribbe [r**ɛ**b**ə**] などの [b] は綴字には関係なく全て /p/ の実現形と考えられよう。先行母音が長母音のときは、[b] は /b/ の実現形の可能性がある： h**á**b [h**ɔ**:b], h**á**be [h**ɔ**:b**ə**], tab [t**æ**:b], tabe [t**æ**:b**ə**] (cp. h**o**p [h**ʌ**b], h**o**ppe [h**ʌ**b**ə**], tap [t**a**b], tappe [t**a**b**ə**]), sk**æ**rne [sg**ɛ**:b**n****ə**], **æ**b**l**e [ɛ:b**l****ə**].

以上の三つの点から、音節末 [b] は形態音韻的交替がある場合もない場合も、/p/ および /b/ の実現形であると解釈することにする。

2.1. 音節末第二子音としての /d/:

§2.2.以下でとり上げることは、/d/ がゼロで実現される場合（「潜在」の /d/）と [d] で実現される場合（「顕在」の ([d]=) /d/ であるが、単音節形末の [d] に関しては rd を除きほとんどとり扱われてきていない。多音節形中の 母音間子音群の音節分けについては、Basbøll (1972a; 1973a; 1974) によって大いに検討されている。彼によれば（以下、Basbøll (1974, 72および87ff. による）、母音間子音群は次のように音節分けされる： 原則(1): 母音間子音群は可能な語頭および語末子音（連結）に分けられる； 原則(2): (1)に反しない限り、母音間子音（群）の音節境界は後続音節が強母音を含むならもっとも左側に、shwa ならもっ

とも右側にいく (cf. §1.2. の shwa の前の 単一子音の例)。これに加えて彼は、原則(2)に対する例外原則を立てる (以下、これを原則例外(2a)とする): 子音連結の第一子音が 基底有声継続音または鼻音で、第二子音が /g/ 以外の閉鎖音である場合には、これら閉鎖音の前に、/g/ ではその後に音節境界が来る (= は音節境界):

lam = pe, jam = be, plom = be,
kæn = tre, æn = dre, vær = ten, ver = den,
mal = ke, vær = ke, alg = e, værg = e, ærg = re.

この原則例外 (2a) は /g/ 以外の閉鎖音に適用されるとはいうものの、彼の音節分けの意図の一つは /d/ の処理にある。音節末での「弱化」を大前提として、彼は、「潜在」の /d/ は原則(2)によって音節末子音、「顕在」の /d/ は原則例外 (2a) によって後続の音節頭子音となるとする。しかし、(2)によるか (2a) によるかの音韻的動機は明らかではないし、これらの原則は経験論的に必ずしも適切ではない (cf. Molbæk Hansen (1979) の批判)。その上、彼の原則は単音節形における顕在の [d] の処理には役立たない。単音節形では音節境界を利用することはできないからである。

それ故、以下では主として単音節基本形を用いて /d/ について検討していくことにする。ただし、厳密には単音節形ではないものも一部含む。それは語末音節が強強勢をもつ外来語である。なお、§2.2. 以下の各節で扱う音声形が /t/, /d/ あるいは別の音素に属するか、示差的素性は何かといった最終的解釈は §3. で行うこととし、§2. ではいくつかの解釈可能性を示すだけにとどめる。

2.2. 「潜在」の /d/:

Hjelmslev (1951) によれば、たとえば基本形 held [hel'], mand

[man'], værd [væ•'ɪ] の d は発音されないが、この d は音素的には /d/ であるという。なぜなら、これらの基本形にたとえば形容詞派生辞 -ig ([-i]) を付した派生形では各々、heldig [heldi], mandig [mandi], værdig [væɹdi] となり、[d] が現れるからという ([d] は後続音節頭へ移行する)。このような場合、基本形 held, mand, værd に音声的にはゼロ (= 無音) で実現される「潜在」の /d/ を認めておかないと、派生形の [d] を導く妥当な根拠がなくなることになる (cf. フランス語: petit(e) [pəti(t)], bas(se) [ba(:s)], blond(e) [blɔ̃(:d)] etc.)

Hjelmslev は「潜在」子音の /v/ も認めるが、本論では閉鎖音 /d/ に集中することとして、彼が潜在の /d/ を認める根拠は派生形に現れる [d] のみによるのではない。たとえば、(a) vel [vɛl], man [man], (b) held [hɛl'], mand [man'] をみても、stød は (a) では起っていないが、(b) では起っている。子音の上または後に起る stød は基底有聲子音 (が音声的に有聲継続音または鼻音で実現されるとき) に起り得る (cf. 拙論 (1976, 7)), 当該基底子音の後にもう一個基底子音が来ないと起り得ない。つまり、(a) の音節末 [l, n] は単一子音 /l, n/ である故 stød が起らないが、(b) では [l, n] の後にもう一つ子音があるので [l', n'] となるという (cp. hal's, hal'm, kan't, dan's)。 (b) の場合のもう一つの子音は前述の /d/ である。このように考えると、tal [tal], hal [hal'] などは各々 /tal/, /hall/ となろう (cf. Basbøll (1972a; 1972b); 拙論 (1976))。

さらに、Hjelmslev (*op. cit.* 19) は、synd [sɔn'], løn [lɔen'], søn [soen] のような前舌円唇短母音+鼻音の場合では、[ɔn'] をもつ形は /nd/ (潜在の /d/) をもち (synd+ig [sɔndi]), [ɔen'] は /nn/, [œn'] は /n/ と解釈すれば、鼻子音 (+子音) の前の前舌円唇短母音は一個の基底音素に還元できる可能性があるとして述べている。Basbøll (1970, 191; 1971, 190f.; 1972b, 10) も同じ考えをしている。

いずれにせよ、Hjelmslev のいう「潜在」子音はまさに生成音韻論など

でいう基底子音に他ならない。

ところで、-ld, -nd, -rd の単形態単音節形で d が発音されず、そして [d] が現れる屈折形とか派生形を現存の語形としてもたないとき、d を音素的にどのように扱ったらよいであろうか（以下、これを「黙字」の d と呼ぶ）。-rd は -ld, -nd とは事情が異なるので §2.6. で別に扱うことにして、ここでは -ld, -nd 形のみをみしてみる。たとえば、hold, vold（暴力）、hånd, ånd はいずれも語源的に d をもつ。この中、hold, hånd は -holdig, （母音交替を伴って）-hændig の派生形中に [d] が現れるので基底に /d/ を認めるべきであるが、vold, ånd の d は黙字である。また、次の例では全て語源的には d をもたない（語源的には、音節末子音は (1) では単一子音、(2)～(4) では同一重子である）：

- | | | |
|------------------|---------------|---------------|
| 1) tal [tal] | vel [vel] | man [man] |
| 2) hal [hal'] | skel [sgel'] | |
| 3) stald [sdal'] | fjeld [fjel'] | spand [sban'] |
| 4) fald [fal'] | held [hel'] | mand [man'] |

- | | |
|------------------|---------------|
| 1) skin [sgen] | ven [væn] |
| 2) | pen [pæn'] |
| 3) skind [sgen'] | svend [svæn'] |
| 4) sind [sen'] | |

(1)は前述のように st $\emptyset$ d が現れないので音節末子音は一個ということになろう。(4)は st $\emptyset$ d が起ること、-ig 派生形容詞などに [d] が現れるので /ld, nd/ となろう。(2)は同一重子音 /ll, nn/ とみなすが、音声的には同一重子音はないので、この基底重子音は st $\emptyset$ d 予測規則のために他ならない (cf. 拙論 (1976))。問題は(3)で、これらの語形は st $\emptyset$ d をもつので第一子音 /l, n/ の後にもう一つ子音があるはずである。Hjelmslev (*op.*

cit. 23) は(3)のような語形は(4)と同様 /ld, nd/ と解釈しているが (cf. 前述の前舌円唇短母音の解釈), (2)と同様に 同一重子音とみることもできる。

以上, §2.2.で述べた基本形に関する限り, 音節末 /d/ は /l, n, r/ の後ではゼロで実現される。これらの単音節基本形の後に shwa で始る屈折語尾あるいは派生辞が付加された場合でも, また (§§2.3.—2.6.で扱うもの以外の) /-ld, -nd, -rd/+shwa の多音節基本形でも /d/ はゼロで実現される。潜在の /d/ が [d] として現れるのは -ig 派生形容詞のみではないが, 単音節および複音節の基本形で潜在の /d/ をもつと考えられるものの中, -ig 派生形容詞で [d] が現れるものを挙げてみる: ene-vælde, fald(e), fold(e), fyld(e), fælde, held, hold(e), silde (adv.), skyld, tilfælde; besinde, fynd, grund(地面), hånd, mand, sind, synd, vand, ynde; færð, værd. (この他, 「擬似派生形」—これらの形容詞に対応の '基本形' がデ語語彙中にみられないもの (主として外来語): gevaldig, gyldig, uvildig, vældig; anstændig, beständig, elendig, myndig, *etc.*, *etc.*; ihærdig.)

/-ld, -nd/+shwa の多音節基本形は, 音節分け原則(2)にしたがって /ə/ の前で音節分けされるとすれば, 単音節形の場合と同じ規則を適用できる。

ついでながら, 黙字の d の例を示すと次のようになる: -ld, -nd (+shwa) の基本形の場合 (-rd については §2.6.でとり上げる): (n.) fjeld, ild, kald, told, uld *etc.*; (a.) bold, huld, kold, mild, vild *etc.*; (n.) bjælde, hylde, kilde, nælde, skulder *etc.*; (v.) hælde, kalde, melde, skælde, spille *etc.*; (n.) and, bind, hund, svend, ånd *etc.*; (a.) blind, ond, rund, sand, tynd *etc.*; (n.) bonde, ende, hinde, kvinde, pande *etc.*; (v.) bande, binde, hænde, kende, skynde *etc.*

2.3. /l, n, r/ 以外の子音の後の [d]:

/l, n, r/ 以外の子音の後に [d] が現れることがある:

[i(ʔ)d]: sløjd [slɔi'd], guide [ɡaid];

[u'd]: hævd [hœu'd], haud [hɔu'd, hau'd], laud [lau'd, lau'd];

[ʊ'd]: smaragd [sma'raʊ'd], lægd [lɛʊ'd, lɛ:ʊ'd];

[gd, ʊ'd]: bygd [bygd, byʊ'd].

この中, guide は英語, haud, laud, smaragd はラテン語, sløjd はスウェーデン語からの借入語である。Vestergaard (1967) はこれらの d を /t/ とし, 連結は各々 /jt/ ([i(ʔ)d]), /vt/ ([u'd]), /kt/ ([bygd]), /gt/ ([byʊ'd], [lɛʊ'd, lɛ:ʊ'd]) とする。第一子音の解釈には問題はない。第二子音の /t/ の解釈については, たしかに上例の d → [d] と, t (= /t/) → [d] (døjt, fløjt, sprøjt; magt, digt, agt, akt, takt, sekt *etc.*) と発音上の相異はない。形態音韻的な交替もない。しかし, 末尾位置で弱化ではなく「無声化」が起ると解釈して, /d/ は音節末第二子音としては [-sonorant] の子音 (/l, m, n, r/ 以外) の後では [d] となる, とすることもできよう。ただし, /d/ と解釈した場合, この位置での /d/ と /t/ は音声的に中和することになる。

/ə/ に終る多音節単形態形で d=[d] の語には次のようなものがある: arbejde, bebrejde, drøjde, fejde, gelejde, lejde, lejder, spejde; høfde; および hævd より派生の hævde (v.) および(疑似)派生形の høvding。これらの [d] は音節分け原則例外(2a)を用いなくても, つまり, (2)を用いても, 単音節形と同じように処理することができよう。

2.4. -ld:

-ld の d が [d] となるのは bold [bɔl'd] (ボール, 球) の一語のみである。これは本来語である (cp. 同義の balde [balə]). そして, bolt

[bəl'd] という（低独語からの借入）語と 同音異義である。この [d] が /d/ から派生するとする積極的な理由はみつからないが、閉鎖音全体の異音分布から /d/ の可能性はある（これについては §3. で述べる）。

Hjelmslev (*op. cit.* 23) は bold の d を /t/ または /d/ としているが、その理由ははっきりしない。

2.5. -nd:

-nd の d で [d] となるのは全て 音韻的に外来語らしい外来語である：addend [a'den'd], band ((ジャズ)バンド) [bæ(:)nd], blond [blɒn'd], (happy) end [(h)abi]end], (week)end [(wi(:)g-, 'vi(:)g)end], [(wi(:)-, 'vi(:)g)en], konfirmand [kɒnfir'man'd], sekund [se'kɒn'd], vagabond [vaga'bɒn'd].

音韻的に外来語らしい外来語という意味は次のようなことである：合成語ではないにもかかわらず、弱強勢音節中に /ə/ でない母音が現れている；多音節形の場合、強勢が語末音節に置かれている；単音節形末の /n/ が子音に後続されているにもかかわらず、stød をとらない場合がある；本来語には現れない音節頭の [w] がある、などである。

語源的または音韻的な意味での“本来語”における -nd の d は少なくとも単音節基本形では発音されない。§2.2.で示した -nd の d は派生形で [d] が現れるため /d/ とすべき場合 (mand(+ig), vand(+ig), sind(+ig), synd(+ig), etc.) と、d は黙字であるが stød があるため /nn/ または /nd/ という二子音連結とみなすべき場合 (spand, skind, svend etc.) とがあった。

この点で本節に示した 外来語の nd の [d] は本来語における /d/ のふるまいと明らかに異なる。これらの 外来語の中、対応の派生形からみて [d] が /d/ の実現形であるとみなし得る語が三語ある：blond (a.)-blondine (n.), se'kund (n.)-sekundere (v.), sekun'dær (a.), vagabond (n.)-vagabondere (v.)（ただし、デ語に入ってからできた派生形

は vagabondere のみである)。その他の四語 (addend, band, end, konfirmand) では [d] が /d/ の実現形であることを示し得る派生形などはみられない。

これらの [d] は次のように解釈されよう：(1)全て /d/ とする ([+foreign] とする)；(2)全て /t/ とする (派生関係を認めない，そして，“派生形”の方は /d/ とする)，(3)派生形のあるものは /d/ とする ([+foreign] とする) が，派生形のないものは /t/ とする。なお，/t/ としても /d/ としても，band, end に stød がないことは有標化されなくてはならない (この band, end も後述 (§2.6.) の stød のない lord, rekord, standard, steward も英語からの比較的新しい借入語である)。

/ə/ の前の nd に関して，nd が [nd] となるのは全て外来語の名詞である：

(基本形)：bande (n.), beau-, demi'monde, blonde (n.), fender, gelinde, grande (n.), guir'lande, le'gende, ro'tunde, runde (n.), sala'man'der, sonde, tender；

(基本形弱強勢位置)：kande'la'ber；

(合成形(?)弱強勢位置)：bande'role；

(複形態) (種族・民族名等)：in'der, ole'an'der, ven'der, u'gan'der.

これらの中，legende, sonde, (複形態) inder, vender, ugander などの関連形または派生形は /d/ の音節頭実現形としての [d] をもつ：legen'da'risk, son'de're, in'disk, ven'disk, u'gan'disk. Basbøll によれば，上に示した多音節形では音節分け原則例外(2a)によって n と d の間に音節境界が来ることになるが，原則(2)を用いても単音節形と同じように処理することも可能であるはずである。

2.6. -rd:

-rd の d がゼロとなるか [d] となるかは先行母音の長さによる：すなわち，-rd の前の基底母音が長ければゼロ，短ければ [d] となる (Bassbøll (1972a, 202; 1972b, 12))。この解釈の場合，本来語か外来語かは直接には関係しない：

(i) d = ゼロ :

- /ɛ:/ ([ɛ:]): fæ'rd, svæ'rd, væ'rd (a.), væ'rd (n.);
- /o:/ ([o:]): bo'rd, fjo'rd, gjo'rd, jo'rd, mo'rd, no'rd, o'rd;
- /ɔ:/ (/ɔ:r/[ɒ:]): gá'rd, há'rd;
- /a:/ (/a:r/[ɑ:]): billard [bil'ja:, 'bil'ja:], ha'sa'rd;

(ii) d = [d]:

- /i/ ([i]): hir'd;
- /ɛ/ ([ä]): lær'd;
- /y/ ([y]): byr'd;
- /u/ ([u]): ab'sur'd;
- /ɔ/ (/ɔ:r/[ɒ:(')]): hjor'd, a'kkord, lor(')d, re'kord;
- /a/ (/ar/[ɑ:(')]): ba'star'd, leo'par'd, lom'bar'd, longo-'bar'd, milliard [mil'a:d, mil'a:], pou'lar'd, stndard, steward, yar'd.

まず，(i)の d がゼロとなる場合をみてみよう。上例中，færd, værd (a.), jord, mord, nord, hasard は派生形で [d] が現れる（その場合，強強勢音節中の母音は短母音音素化する）：færd [fɛ:r] ((←/fɛ:r/)～færdes [færdəs] (←/færdəs)), værdig, jordisk, morder, nordisk, hassar'dere. したがって，これらの語の d は §2.2. で述べたように /d/ となる。つまり，同一音節中の母音が音素的に長ければ，/r/ の後の /d/

はゼロで実現される。

(i)に属するその他の語の d は黙字なので、/d/ の存在を主張できない。stød の存在も /d/ の有無とは関係ない。というのは、強強勢をもつ語末音節中の母音は音素的に長ければ stød をとる (cp. bo [bo:], bor [bo:r] vs. bord [bo:r])。 (なお, billard の [ˈbilja:] 発音形の stød は別の条件による。) つまり、/d/ が存在することにしてもしなくても正しい実現形を導くことができる。どちらとも決めかねるが、/d/ がいないことにするのが音韻論的にはもっとも自然であろう。その点、次に述べる(ii)の場合とは異なる。

(ii)の d が [d] となる場合は、この [d] を /d/ か /t/ のどちらから派生するものとしなくてはならない。まず、(ii)の例中から、[d] が /t/ ではなく /d/ から派生したものとみなすべきであるとか、あるいはみなし得ると思われる語からみていくことにする。

まず, hjord [jɔ:d] を hjort [jɔ:t] とくらべてみると、前者には stød があるが後者にはない。[ɔ:, ɔ:] は /ɔr/ という二つの音素が融合して実現したものであるが (cf. 拙論 (1974b)), 前者では /r/ に stød が起っているのに対し、後者の /r/ にはそれが起っていない。その理由は次のようになる。基底短母音直後に現れる音節末 /r/ は、もしそれに続く子音が音素的に「無声」子音なら、stød をとらない (cp. værk, vært-vær'n, bark-bar'n, bar'm, torsk-tor'v)。この規則は変化しつつあることは事実であるが (cf. Basbøll (1970, 39); 拙論 (1974a, 69f.)), 全体としては未だその規則は生きている。上例の hjord の場合 /r/ に stød が起っているので、/r/ の後の d は有聲の /d/ ということになる。一方, hjort の /r/ には stød が起っていないので、/r/ の後の t は無聲の /t/ ということになる。この hjord と同様に /r/ に stød が起る場合の rd は /rd/ ということになろう (hird, byrd, absurd, bastard, leopard, lombard, longobard, milliard, poulard, yard)。

さて、次に akkord, rekord, standard, steward をみてみると /r/

に stød が起っていない (akkord は仏語から、その他は英語から)。したがって、この d は stød に関しては hjort の t と同じふるまいをする。しかし、これらの語と 意味的、形態音韻的に 関連する akkordere [akɔ'de:ʌ], standardisere [sdandadi'se.'ʌ], stewardesse [sdjuwa-'dɛsə] の d は明らかに /d/ である。(cp. sort (種類) [sɔ:d]-sortere [sɔ'te:ʌ])。Akkord *etc.* と akkordere *etc.* は各々別個に 借入された 外来語には 違いないが、共時音韻論では 両者の関係を 派生関係とみなして よいと思われる (なお, lombar'dere, longo'bardisk は デ語でできた 派生形である; これらの語形の基本形 lombard, longobard の [d] は先に stød 生起のために /d/ としたものである)。

(ii)の中、残りは lord と rekord である。Lord の [lɔ:d] 発音形の方の [d] は stød が生起するので /d/ とみなすことができる。問題は stød も対応の派生形もない lord [lɔ:d] と rekord である。ただ、stød に関していうなら、先に /d/ をもつとみなすことにした akkord, standard, steward も stød をもたない。つまり、これらの三語に stød が起らないことは「例外」(＝外来語 ([+foreign])) として有標化されなくてはならない。これらと同様に lord と rekord を扱うこと、つまり、[d] は /d/ であるとすることはできよう。あるいは、この二語に限り [d] は /t/ であると主張することも可能であろう。

多音節の基本形および合形成要素中で -rd が shwa に後続されるとき、d がゼロとなるか [d] となるかは単音節形の場合の条件と同じとみてよい。すなわち、先行強母音が音素的に長ければゼロ、短かければ [d] となる。どちらの場合も本来語も外来語もある：

(i) d = ゼロ : gærde, gærdesmutte, kårde;

(ii) d = [d] : barde, burde, byrde, for'færde, garde, garde'robe, ge'bærde, horde, hyrde, indbyrdes, ko'karde, korde, myrde, orden, ordentlig, torden, verden, vorde; (複形態)

(民族名): kurder.

なお, turde の d はゼロも [d] もある。

これらの中, 派生形をもつものもいくつかある。Basbøll は(彼の示す例は上例のごく一部にすぎないが) これらの多音節形の d を全て /d/ とし, ゼロとなるときは音節分け原則(2)によって音節末の, [d] となるときは原則例外(2a)によって音節頭の実現形であるとする。ところで, 単音節形における条件変異音のゼロと [d] は Basbøll 自身の考えである。Shwa の前の rd の d も単音節形の場合と同じ扱いができるわけで, そのようにすれば, 音節境界を必ずしも導入しなくても済むと思われる。上例中, turde の d はゼロ ([tu:ʌ]) と [d] ([turdə]) があると述べたが, 今仮りに /d/ を認めることにすれば, turde は /tu:rdə/ と /turdə/ の二つの音韻形をもつことになろう。(なお, 拙論(1976, 15f.) の /rd/ に関してあいまいな点は本節で述べたように訂正する。)

3.1. まとめ:

まず初めに, 閉鎖音に関し関与的な素性を示すことにするが, 基底素性と表層素性とではかなり相異なる点がある。なお, この二種の素性表は Basbøll (1973a) に基づくものである (/h/ は省略):

基底素性:

	P	t	k	f	s	b	d	g	▼	j	l	m	n	r
sonorant											+	+	+	+
continuant				+	+				+	+	+			+
voice						+	+	+	+	+	+	+	+	+
art. place	L	D	V	L		L	D	V	L	P	D	L	D	
							D?							D?

L=[labial], D=[dental], P=[palatal],

V=[velar], U=[uvular].

表層素性：

	b	d	g	p	t	k	s	f	v	ð	ʃ	m	n	ŋ	l	r	ɹ
syllabic																	+
sonorant									?	?	+	+	+	+	+		+
voiced									+	+	+	+	+	+	+	+	+
aspirated				+	+	+	+	+									
sibilant							+										
nasal													+	+	+		
continuant								+	+	+	+	+				+	+
art. place	L	D	V	L	D	V	D	L	L	D	V	L	D	V	D	U	U

さて、§§1.—2.で述べてきたことをまとめてみると、基本語形における基底閉鎖音の実現形は次のようになる。

/p, t, k/ の実現形は比較的簡単に記述できる：強音節頭第一子音としては [p, t, k], その他の場合は [b, d, g], ということになるが、以下、/b, d, g/ と対比させながらみていくことにする。

[1]：音節頭子音として、強音節頭第一子音となるとき、/p, t, k/ ([-voice]) は [p, t, k] ([+ aspir, -voice]), /b, d, g/ ([+voice]) は [b, d, g] ([-aspir, -voice]) となる (§1.2.)。この場合、基底「有声性」の対立は音声的には「有気性」の相異によって実現されるところとなるが、相対的な「強さ」の相異は保たれているわけである。

[2]：音節頭第二子音としては、閉鎖音は /s/ の後にもみ現れるが、この場合、強音節中でも弱音節中でも [b, d, g] のみ現れる。これは /b, d, g/ の実現形と解釈する (§1.3.)。

弱音節頭子音については明確には述べてこなかったが、[3]：原則として /p, t, k/ と /b, d, g/ の対立は中和され [b, d, g] で実現される。しかし、[3']：外来語 ([+foreign]) の強母音 (full vowel) を含む弱音

節頭では /p, t, k/ の実現形として [p, t, k] が現れることがある。その場合には弱音節頭でも /p, t, k/ と /b, d, g/ の対立はあることになる。この [p, t, k] は強音節頭の [p, t, k] とくらべ「氣息」はずっと少ない。したがって、この二つの位置の [p, t, k] の相異は音声的な詳細規則によって区別されるようにしなくてはならない。いずれにせよ、[3] に関して全体的に言えば、/p, t, k/ には音声的に「無気音化」という一種の弱化が起るが、/b, d, g/ の方には顕著な弱化は起らないといえよう（閉鎖音 [p, t, k, b, d, g] の音声的性質の詳細については拙論（1973）を参照されたい。）

音節末では次のようになる。

[4]: /p, t, k/ は [b, d, g] ([-cont, -voice, -aspir]) となる (§1.2.). これも「無気音化」という弱位置での弱化といえよう。

音節末の /b, d, g/ は次のようになる。

/b, g/ の音節末実現形は一定であるが、/d/ は第一子音のときと第二子音のときでは実現形が異なる。したがって、次の [5] は /b, g/ に関しては音節末全て、/d/ に関しては母音直後の第一子音の場合である：

[5]: /b/ → [b] ([-cont, -aspir, (-voice)]),
/d/ → [ð] ([+cont, +voice, (-aspir)]),
/g/ → [ŋ] ([+cont, +voice, (-aspir)]). (§1.2.)

（ただし、/b/ は第二子音としては実際には現れない。また、/ng/ は [ŋð] を経て [ŋ] となる (§1.4)）

共時的には /b/ には「継続音化」という弱化は起らず閉鎖音 [b] のままのため、/p/ の実現形の [b] と音声的に同じとなる (§1.5.). 一方、/d, g/ は音声的に「継続音化」するため、/t, k/ 対 /d, g/ の対立は「継続音性」素性によって保たれる。この場合、[4] の /t, k/ も [5] の /d, g/ も相対的に弱化しているといえよう。（なお、[θ, x] は標準語には現れない。）

以下は音節末第二子音としての /d/ に関する規則である。まず、§2.3.

で述べた /l, n, r/ 以外の子音の後の [d] に関してであるが, [6]: /d/ は [-sonor] (/l, m, n, r/ 以外) の子音の後では [d] となる。ただし, 現状ではこの環境の [d] が /d/ であるとしなければならない対応の派生形をもたないので, この [d] は /t/ の実現形とも考えられる (§2.3.)。ここに属する語の中, 本来語の [d] は [ð] → [d] の通時的変化の結果で, これは「継続音化」とは逆方向の変化, つまり, “強化”ということになるが, 強化というより「無声化」という方が適切であろう。したがって, この [d] は音節末「無声化」によって /t/ と /d/ の対立が中和したものであるということになろう。

次に, /l/, /n/ の後での「潜在」および「顕在」の /d/ をみてみよう。
[7a]: 本来語 ([+native] または [-foreign]) では, /d/ ([+dental]) は /l, n/ ([+dental, +sonor]) の後では「(進行的) 調音点同化」によりゼロとなる (§2.2.)。 黙字の d については後述する。

一方, [7b]: 外来語 ([-native] または [+foreign]) では 調音点同化は起らないが「無声化」して [d] で実現される (§2.5. の /nd/)。

§2.4.で述べた本来語の **bold** の [d] は /d/ の実現形であるとすれば, 音韻的には外来語 ([+foreign]) とすることになる。また, 真の外来語の中, 派生形, 屈折形などで /d/ だと証明できない [d] をもつ *addend*, *band*, *end*, *konfirmand* および多音節形の *bande*, *runde etc.* の [d] も /d/ とすると, **bold** もさらには [6] も加えて次のように言えよう: [7a] 以外の場合, 子音の後で /d/ は [d] となる。これが真の語源的観点から不自然であると考えらるなら, [6] と **bold** の [d] は /t/ の実現形とみてもよいが, 筆者は次の /rd/ も含め全て /d/ と考えたい。(/t/ としても /d/ としても, *band*, *end* に *stød* がないことは有標化されなくてはならない。また, *olding* の [d] は /d/ であるが, この形態音韻環境での [d] は例外である。)

3.3. /rd/ および /r/ の調音点：

残るは /rd/ であるが、/rd/ のふるまいは基本形で /d/ が潜在のときは[7a]の、顕在のときは[7b]のタイプに似ている。ただし、[6]と[7]では子音連結の前の母音は短い。今、/rd/ に先行の母音音長の相異 (§2.6.) はのけておき、子音 /r/ の性質に焦点を合わせてみよう。/r/ の音節頭実現形 [r] (=IPA [ɹ] は(口蓋垂)摩擦音であるので、音声的には[-sonor]である。一方、現在問題としてとり上げている音節末の[r̥] (IPA [p̥, ɑ̥, ʌ̥]) はすでに年輩の世代の言語でも半母音化しており (cf. 拙論 (1974a)), これを [+sonor] とするのは妥当である。基底では /r/ は後述の規則を有効にするために [+sonor] とすることにする。

さて、調音点であるが、音声的に [r], [r̥] は口蓋垂音 ([uvular]) であるが、基底 /r/ も [uvular] であろうか。/rd/ の /d/ がゼロで実現されるとき、/r/ は[7a]の /l, n/ と類似のふるまいをする。それでは /r/ は [dental] であろうか。

まず、[dental] である可能性を考えてみることにする。Basbøll(1973b) の音節頭子音結合規則によれば、音節頭では同調音点の子音は結合しない。彼は、*/t/-/, */d/-/, */s/-/ が存在せず、/tr/-/, /dr/-/, /sl/-/ が存在するのは /t, d, l/ と /r, s/ の調音点異なるからであるという。*/s/-/ が存在しないのは /s/ と /r/ が同調音点の子音であるからであるとし、この二音素を “queer dentals” と名づけている。これは音節頭の場合であるが、音節末では同調音点の子音は十分結合し得る：たとえば /lt, rs/ (cf. §1.4.)。

いずれにせよ、/s/ と /r/ が一種の [dental] であるということには筆者も賛成である。/s/ に関しては、たとえば形容詞比較級 *bedre* [beðrɑ] ~ 最上級 *bedst* [besd], 不定詞 *føde* [fø:ðə] ~ 派生名詞 *fødsel* [føsəl] などの交替をみると、比較級とか不定詞の [ð] (/d/) が最上級とか派生形では /s/ の前で脱落している。これは丁度 /t/ ([d]) の前で /d/ ([ð]) が脱落するのと同じ音韻現象といえよう： *føde* ~ *født* [fø·'d], *hvid*

(a.) [vi:ð]~hvidt [vid]。つまり、/d/ の脱落は /d/, /t/, /s/ がともに [dental] であるために起る調音点同化によるものといえよう。/s/ が [dental] であるとして、/s/ と /r/ は Basbøll にしたがって同調音点であるとすれば、/r/ も [dental] ということになる。/r/ は音声実現形では [uvular] としても、基底では /l, n/ などと同様 [dental] であるとすれば、/rd/ の潜在の /d/ は[7a]によって処理できることになる。この場合、語源的な本来語も外来語も音韻規則のためには「本来語」([+native]) とすることになる。一方、顕在の /d/ は[7a]以外の場合、つまり、[7b]の「外来語」([−native]) ということになる。この音韻的「本来語」と「外来語」の区分は ad hoc であると思われるかもしれないが、現実にはそれほどでもない。§2.6.で示した rd(+shwa) の例はこの綴字に終る語形のほとんどを示したつもりであるが、潜在の /d/ をもつ6語の中、外来語は hassard のみである。そして、潜在の /d/ と黙字の d を合わせた18語の中、外来語は billard, hasard, kårde の3語のみである(黙字の d の音韻解釈については後述する)。一方、顕在の /d/ には lord の [lɔ:d] 形と rekord も含めることにするが、§2.6.の37例中、本来語とみなし得るものは12語である: burde, byrd, byrde, hjord, hyrde, hærde, indbyrdes, lærd, myrde, torden, verden, vorde (なお, turde は本来語である)。

以上、/r/ を [dental] としての解釈であるが、-ld, -nd, -rd の黙字の d を除き(後述)、/d/ の実現形を導く規則を最終的にまとめてみると次のようになる: [8]: /d/ ([−cont, +voice, +dental]) は音節頭では [d] ([−cont, −voice, −aspir, +dental]) となる; 音節末では、母音直後では [ð] ([+cont, +voice, (−aspir), +dental]), 子音後では、音韻的本来語の /l, n, r/ ([+sonor, +dental] & [+native]) の後ではゼロ、その他の場合は [d] となる。

ところで、/r/ および /s/ を [dental] とするとしても、これは Basbøll がいうように “queer dentals” であって、いくつかの理由から真の den-

tals とするのはためらわれる。次の表 I 中の語は /ld/, /nd/ をもつ。これらの語の屈折形または派生形で /d/ は /l, n, s/ が後続するときはゼロ, /r/ が後続するときは [d] となっている:

表 I :

/ld, nd/ /d/ = ゼロ	/ldl, ldn, lds/ /d/ = ゼロ	/ldr/ /d/ = [d]
holde (v.)	holdning (n.)	
fylde (v.)	fyldning (n.)	
grund (n.)	grundling (n.)	
ynde (n.)	yndling (n.)	
land (n.)	landlig (a.)	
under (n.)		undre (v.)
anden (pron.)		andre (pron. ; pl.)
ind (adv.)		indre (a. ; compar.)
	ældst (a. ; superl.)	ældre (a. ; compar.)
	mindst (a. ; superl.)	mindre (a. ; compar.)

表 I の語形では, /s/ は /l, n/ と同じふるまいをするグループに入る。たしかに, bedst, bidsk, fødsel などの /d/ は /s/ の前で同化してゼロとなる (cp. /d/ = [ð]: bedre, bide, føde)。しかし, 所有格語尾 -s (/s/) の前では /d/ (= [ð], [d]) も /t/ (= [d]) も常にそのまま実現される (cf. Brink/Lund (1975, 458f.))。派生辞 -skab [-₁sgæ:b] の前でも同様である。その点で /s/ は /l, n/ とか前述の /t/ (føde~født, hvid~hvidt) などとは異なるようである。

さて, /r/ に戻るが, /ld, nd/ に /r/ が後続するとき /d/ は [d] となる。これは /l, n/ と /r/ の調音点が異なるためかもしれない。つまり, /d/ が /r/ とは調音点が異なるため「異化」が起って /d/ → [d] となるの

かもしれない。この現象は基本形の /ldr/ でも同様に、aldrig, skildre, ændre, vandre *etc.* でも常に [d] が現れる。(/r/ が /d/ に先行するとき、つまり /-rdC-/ではこの限りではない。Basbøll (1974) は /r/ が /d/ の前にきても (= /rdC/)、後にきても (= /Cdr/)、/d/ はゼロとなるというが、それは正しくない。たとえば、nordlig (/no: rd+li/) では /d/ はゼロである。また、派生動詞 ordne, hærde 等の /d/=[d] は orden, hærde 等の顕在の /d/ ([d]) をもつ基本形から派生するものである。)

以上のことから、/r/ と /s/ はやはり “queer dentals” で、/l, n, t, d/ のような真の dentals ではないように思われるが、“queer dentals” の調音点素性については一種の [dental] とするにとどめ、未解決のまま残すことにする。

上述[8]の規則は /r/ と /l, n/ が同調音点の子音と仮定してのものであったが、/r/ が [dental] でないとすれば、/rd/ の /d/ の異音分布規則は§2.6.で示したように、[9]: 長母音音素の後ではゼロ、さもなければ (= 短母音音素の後では) [d] ということになる。この母音音長の相異は種々の派生形を扱うとき重要な事実であるので決して無視できないことではあるが、/d/ の異音分布規則に関しては[8]を本論の結論とし、[9]はそれを補う規則と考えることにする。

最後に、黙字の d の音韻解釈であるが、-ld, -nd から検討することにする。単音節形では stød の生起を予測させるために -ld, -nd は /ll, nn/ または /ld, nd/ の二子音連結とすべきであるが (§2.2.), 前者の /ll, nn/ という同一重子音とみる方が自然であろう。これは多音節形との関連での解釈であるが、多音節形では -ld, -nd を /ld, nd/ とすると具合が悪い場合がある。先に表 I で示したように、/ld, nd/ /d/ は /r/ に後続されるとき [d] となる。しかし、次の表 II の -ldr-, -ndr- の d は発音されない:

表Ⅱ：

ld, nd	ldr, ndr
skulder (n.)	skuldre (n. ; pl.)
mylder (n.)	myldre (v.)
bulder (n.)	buldre (v.)
skvalder (n.)	skvaldre (v.)
smuld (n.)	smuldre (v.)
kilde (v.)	kildre (v.)
dunder (n.)	dundre (v.)
	plyndre (v.)
sønder (a.)	søndre (a.)
	hundrede (n.)

Brink/Lund (1975, 439) によれば, -ldr-, -ndr- の d は何かの屈折形とか派生形とかと意識され得る場合には発音されず, そのように意識されないとか基本形そのものと意識されるときには [d] となる傾向があるという。しかし, 前述の比較級 *ældre*, *mindre* では屈折形にもかかわらず [d] が現れ, *plyndre* などは対応の '基本形' はもたないが, 全体としては彼らの言明は妥当と思われる。

さて, -ldr-, -ndr- で d が発音されないのは /d/ が存在しないからと解釈したい。つまり, 表Ⅰの d は /d/ で, /r/ が後続するときは [d] となるのに対し, 表Ⅱの d は /d/ ではなく /ll,nn/ であるので, 当然 [d] は現れないと考えたい。

以上, もう一度言いなおすと, ld, nd 綴りの基本形の d が黙字の場合, 単音節形では *stød* 生起 予測 規則のために 重子音 /ll, nn/, 複音節形では, 先行母音が短いことおよび 単音節形の関連形 (*spild* (n) /sbill/ ~ *spilde* (v), *bind* (n) /binn/ ~ *binde* (v) *etc.*) を考慮して, 単一の /l, n/ ではなく重子音 /ll, nn/ と解釈する。

これに対し、-rd (+shwa) の黙字の d は先行母音が長いことを考慮して、音素的には単一の /r/ と解釈する：bord=/bo:r/, gård=/gɔ:r/, etc. (§2.6.)。 (なお、rd に r が後続した場合の d=[d] は /d/ と解釈する：ordre=/ɔrdɾə/, nordre=/nordɾə/。)

3.3. むすび：

以上、閉鎖音音素の実現形に関し検討したが、この中で特にとり上げたのは音節末の /d/ である。音節末、特に語末で起りやすい音韻現象は「弱化」(=「継続音化」、さらには「母音化」)、それとは逆方向の変化といえる「無声化」、そして「同化」などであろうが、これらが全て /d/ に顕著に現れているように思われる。そのため /d/ の異音分布規則が複雑になっているといえよう。本論では基本語形を中心に扱ったため、これらの音韻現象が特に /d/ に顕著に現れたのだが、基本形と非基本形の間の形態音韻変化では他の子音にも同じような傾向がみられるし、さらには「音節境界移行」とか「異化」も平行してみられる。

閉鎖音に関して、本論で述べたことで全てが終ったわけではなく、/g/ の最終実現形、/g/ と /v/ の表層での中和、[ɔ̥]→[u̥] の場合の音韻解釈、/d/ 以外の潜在子音など未だ検討していないことがある。しかし、これらの事柄は本論の結論を覆すものではないので、形態音韻変化を扱うときにとり上げることにする。

参 考 文 献

Andersen, Poul (1954): *Dansk Fonetik*. Copenhagen.

Basbøll, Hans (1970): "Notes on the phonology of Danish imperatives with a digression on vowel quantity", *ARIPUC* (= Annual Report of the Institute of Phonetics University of Copenhagen) Vol. 4, 15—42.

— " — (1971): "A commentary on Hjelmslev's Outline of the Danish Ex-

- pression System”, *Acta Linguistica Hafniensia* Vol. XIII, No. 2, 173—211.
- “ — (1972a): “Some conditioning phonological factors for the pronunciation of short vowels in Danish with special reference to syllabification”, *ARIPUC* Vol. 6, 185—210.
- “ — (1972b): “Some remarks concerning the stød in a generative grammar of Danish”, *KVAL* No. 729, 5—30.
- “ — (1973a): *Konsonanter I & II (i dansk rigsmål, fonologisk set)*. (mimeographed). Institute of Phonetics, Univ. of Copenhagen.
- “ — (1973b): “Notes on Danish consonant combination”, *ARIPUC* Vol. 7, 103—142.
- “ — (1974): “The phonological syllable with special reference to Danish”, *ARIPUC* Vol. 8, 39—128.
- Brink, Lars & Jørn Lund (1975): *Dansk Rigsmål* (2 vols.). Copenhagen.
- Hansen, Aage (1971): *Den lydlige udvikling i dansk. Fra ca. 1300 til nutiden*. Vol. 2: *Konsonantismen*. Copenhagen.
- Hansen, Peter Molbæk (1979): “A comment on Basbøll’s phonological syllabification as applied to Danish”, *ARIPUC* Vol. 13, 87—120.
- Hjelmslev, Louis (1951): “Grundtræk af det danske udtrykssystem med særligt henblik på stødet”, *Selskabet for nordisk filologi årsberetning for 1948—50*, 12—24.
- Uldall, H. J. (1936): “The phonematics of Danish”, *Proc. II. int. Congr. phon. sc. 1935*, 54—57.
- Vestergaard, Torben (1967): “Initial and final consonant combinations in Danish monosyllables”, *Studia Linguistica* Vol. 21—1, 37—66.
- 間瀬英夫 (1973): 「デンマーク語の閉鎖音」, *Idun* Vol. 1, 3—23.
- “ — (1974a): 「デンマーク語の /r/」, 大阪外大学報第30号, 47—57.
- “ — (1974b): 「デンマーク語の母音——量と質の関係について——」, *Idun* Vol. 2, 3—36.
- “ — (1976): 「デンマーク語の長・短母音——母音音長は後続子音の数から予測できるか——」, *Idun* Vol. 3, 3—34.

- // — (1978a) : 「子音の調音点と調音力の関係——デンマーク語の場合と一般音韻的問題——」, 大阪外大学報第42号, 109—120.
- // — (1978b) : 「デンマーク語母音の音長変化」, *Idun* Vol. 4, 3—18.